対面リーディング通信

2020年 12月

2020年12月1日 発行　　第１９６号（隔月刊）

対面リーディングを再開しました

　前号でお知らせした通り、10月からZoomミーティングを使って対面リーディングを再開いたしました。
　利用者さんからは以前の形での対面を希望される声も頂いているのですが、新型コロナウイルスの感染予防のため、まずは部屋を分けて行う形での再開となりました。
（郵便物の確認や代筆など１部屋で行う必要がある場合は職員が対応しています）

　現状では午前、午後に各１組ずつ、１週間で10組の枠で実施し、お一人あたり週に1枠でのご利用をお願いしています。そのため、以前に比べて利用数が非常に少なくならざるを得ず、対面ボランティアの皆様へのご依頼もなかなかできない状態です。

　利用者の皆様にご不便をおかけし、ボランティアの皆様にも十分に活動していただけないことは心苦しいのですが、今後も状況を注視しつつ、慎重に判断していきたいと考えています。今後ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。

　次ページでは、再開後の約1ヶ月で頂いた利用者さんとボランティアさんの感想、ご意見をご紹介いたします。新しい形での対面のため賛否両論あることは想定していましたが、感染を防止しつつ再開するための方法として、進めていきたいと思います。
　これからもZoomでの対面を改善していくためご意見を頂けましたら幸いです。

※再開当初は３階での受付をお願いしておりましたが、11月から直接５階に上がっていただけるようになっています。引き続きご来館前の検温、手指の消毒、マスクの着用などの感染予防対策にご協力をお願いいたします。

今月号の主な内容

対面リーディングを再開しました			1
寄り道・回り道	鯛専門店　徳ます	木村　謹治	3
誌上勉強会	戦争と障害者	木村　謹治	4
ニポラチャンネルのご案内、お知らせ			8

【利用者さんの声】

- 声の聞き取りには問題はなかったが、機械を通すと味気ない。細かいニュアンスもお互いに伝わりにくく、テンポ良くやりとりが出来なかった。
- 声に違和感があった。それでも再開してもらえただけでありがたい。
- パソコンを通すと、どうしても直接より聞き取りにくい。細かい発音が分かりにくい（注：英語の原書を読まれている方です）。
- 現状では仕方がないと思うが、できれば同じ部屋で読んでもらいたい。早く元に戻ることを期待している。
- このやり方（Zoom）なら来館せずとも自宅でパソコンをつなげば済むのではと思う。先々の話でもいいのでZoomは来館出来ない人に向けてのサービスとして考えるべきではないか。
- 別の図書館でボランティアさんと同室で対面をしたが、距離が遠すぎて聞き取りづらく録音も上手くできなかった。今回は声もはっきり聞こえ、録音も上手くいって良かった。

【ボランティアさんの声】

- 相手の気配、様子がわからないので読むのもやりにくい。内容が相手に伝わっているのか不安に感じる。少し見える方には画面で資料を見てもらったり、こまめに声をかけるなど今まで以上にコミュニケーションをとることが大切だと感じた。
- 英語のスペルが伝わりにくい時に、普段なら大きな字を書いて見せたり、ご本人がルーペを使って確認したり出来たが、声で説明するだけなので難しかった。
- 以前の対面に比べ特に違和感はなく、全く問題なかった。
- 話のやりとりがZoomを介すると少しずれたり、かみ合わないことがあった。
- 同室だと相手の様子を感じながら読むことが出来るが、Zoomは気配が感じられないため、ついつい本ばかり見てしまう。
- マスクをして読むのが大変だと思っていたので、マスクを外して読めたのが良かった。
- 別室で行うことについて、自分は読み手で声を多く発するので、相手への感染の危険性を考えたとき、現状ではこの体制が良いと思う。

以上のように、感じ方にはかなり個人差が見受けられました。実際に体験しないとわからない部分が多いのが現実だと思いますが、参考にして頂ければと思います。

これからもZoomでの対面をしてみての感想やご意見、気がついた点などがありましたら担当までお知らせください。工夫して少しずつでも改善していきたいと考えています。

今までとは違う形での対面のため、戸惑われることや難しい面も多々あると思われます。ご不明な点がありましたら遠慮なくご相談ください。

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

鯛専門店 徳ます

【所在地】　大阪市西区江戸堀 1-17-4
【電話番号】　06-6136-3514
【行き方】　大阪メトロ肥後橋駅２番出口から徒歩５分。
【営業時間】　11時～19時30分（土曜は15時まで）
【定休日】　日曜・祝日定休
【URL】　－

「鯛専門店 徳ます」が、10月にオープンしました。

本館を出て左に曲がり、徐園の門を通り越し、次の信号を左に曲がります。少し歩くと右手に見えてきます。白を基調とした綺麗な店で席数は30席ほどあります。

店主の宇佐泰右（たいすけ）さんは兵庫、東京、中国・上海の日本料理店などで約20年勤務。鯛は宇佐さんの実家が営む養殖場のもので、朝に活け締めしたものをその日のうちに直送して調理されます。

メニューは4種類。

・特別鯛の漬け丼「数量限定」1,000円
・鯛胡麻茶漬け 1,000円
・宇和島鯛めし 1,200円
・松山鯛めし　1,500円

残念ながら一番人気メニューの漬け丼は売り切れ。宇和島鯛めしを頼みました。これは宇和島の郷土料理で、最初は鯛の刺し身を卵の入った出汁に付けて食べます。

ほどよく食べたところで残りの鯛をご飯の上にのせて卵の入った出汁をかけて食べます。

宇和島の沖合いに浮かぶ日振島（ひぶりしま）を根拠地にしていた伊予水軍によって考案されたとも、周辺海域で漁を行っていた漁師によって考案されたとも伝えられる食べ方だそうです。

生の卵と生の鯛の切り身、初めて聞く方は、ちょっと躊躇するかもしれませんが、でも、一度味わってみれば、それが杞憂に過ぎないことが分かります。鯛の旨みに卵とタレのとろっとした食感と味が絡まり、何ともいえぬ美味しさを醸し出します。

僕の若かりし頃は、卵かけご飯が旅の朝食の定番。割った卵に醤油を差し、熱々のご飯に半分だけかけます。残りの半分は2膳めに。美味しかったのに、滅多に食べる事が無くなりました。

鯛の刺身は同一料金で7枚・10枚・12枚から選ぶことがで出来ます。もちろん12枚を選択しました。

味噌汁、茶碗蒸、小鉢、香の物が付いてきます。茶碗蒸しは本当に美味しく、これにも小鉢にも鯛が一杯入っていました。

ちなみに、松山鯛めしは土鍋で炊く鯛の炊き込みご飯（おかわり自由）です。こちらも同じ値段で刺身の枚数を選ぶ事が出来ます。その他に、鯛のあら炊き・鯛だし・小鉢2種・汁物・香の物がセットで付いています。こちらも魅力的ですね。

14時以降はランチを終了している店が多い中で、遅い時間の昼食にも利用でき、便利です。

木村（きむら） 謹治（きんじ）

対面リーディングの実際 41

― 戦争と障害者 ―

広島・長崎に原発が投下されてから、今年で75年たちます。奇（く）しくも「核兵器禁止条約」の批准国が50カ国を超え、発効する年ともなりました。

しかし、世界各地では戦争や紛争が止むことがありません。逃げ惑う民衆と、崩れ落ちる建物。顔も名前も知らない者同士が殺し合う。文明が発達したこの世界で未だに無くならないことは悲しいことです。

今回は趣向を変えて戦時下における障害者を考えてみます。

あなたの宗教はと問われると何と答えますか？　正月は神社にお参りして、結婚式はキリスト教、葬式は仏教と、まるで風習のように取り扱われてきました。

かつて日本人に影響を与えた仏教は飛鳥時代に伝来し鎌倉時代に花開きました。土着の宗教からも影響を受けながら生活全般に影響を及ぼしました。

仏教思想の中で障害者に最も影響を与えたのは、因果応報の理念でしょう。悪い原因を作れば、必ず悪い結果がもたらされる、という理念です。

悪いことの種子を播かぬように…、との戒めの意味で使われるならよいのですが、今、現れている事柄から逆に、過去においてどんなにか悪い事をしたに違いない、という評価を与えて、その人を責める結果を招いたのです。

それもその人の生まれる前の責任まで問われるのですから、たまったものではありません。

しかも、形の異ったものを好まない傾向が強まって、普通でないものは劣悪なものだ、とする障害者観が結びついていきました。障害者やその家族は実に肩身の狭い思いで生きて行かねばなりません。

その反面、生きている間によい事をしておけば死後もよい結果が得られる、との信仰から、困っている人への施しをすることも説かれていたようです。

でも、それが本格的な救済として効果をあげていたかどうかはわかりません。

明治時代に富国強兵政策がとられ、徴兵制度が敷かれると、そこに体に障害のある人たちが合格できない、「軍人になれない」、「国の役に立たない存在」という新たな負の評価が加わりました。「役立たず」「穀潰（ごくつぶ）し」「非国民」といった心ない言葉を浴びせられ、批判にさらされた上、家の中に閉じ込められた人もいました。

このように、戦時下で障害者が受けた差別には、二重の苦しさがありました。一つは、古くからの「因果の報い」思想から来る差別、もう一つは、明治初めの徴兵制によって「軍人になれない」存在におとしめられたことによる蔑視です。戦争が激しくなる頃には、「役立たず」「穀潰し」などと、冷たい言葉のつぶてを浴びた人が少なくありません。

障害者も戦争協力を求められました。各地の盲学校ではマッサージ技術を生かした軍人や労働者への治療奉仕、音楽慰問や食料増産に取り組みました。弁論大会の記録を見ると、

奉仕活動を通じて「こんな私でもお国の役に立てる」と語られており、障害者への重圧がうかがえます。

1945（昭和20）年１月４日付の『点字毎日』に記載されている「新春譜」と題する呼びかけ文には、「我々は過去に於て陸海軍への『航空機献納』に、直接『兵器増産』に、将又（はたまた）第一線の神鷲（かみわし）たちの疲労回復のため『航空あんま』に、産業戦士のための『産報あんま』に、戦病勇士の『慰問治療』に、又『音楽報国』に『食糧増産』に、盲人としてなし得る、ありとあらゆる方面に挺身して来た。（中略）然し、これでもうよいのではない。」

1940（昭和15）年、奈良の橿原で全国盲人大会が行われて、決議として全国の盲人の募金を集めることによって海軍にゼロ戦をプレゼントしようという取り組みがありました。

「航空機献納」は、1942（昭和17）年、全国の盲人からの寄付金をもとに海軍へゼロ戦を納めました。それには日本盲人号という名前が付いており、お披露目の式が大阪の歌舞伎座で行われたことを示す絵葉書、案内の文書が残っています。

「兵器増産」は、軍需工場で働くこと。各地の盲人団体や盲学校は、鍼や按摩の技を生かした治療奉仕を広く行いました。戦場で傷ついた兵士が入院している病院を訪ねて、琴の演奏で慰問する活動もありました。

視覚、聴覚、肢体などの障害のある人々の「戦争への協力」は、しばしば新聞などで大きく報じられ、一般の国民を戦争遂行へとあおるキャンペーンに利用されたのです。

「防空監視」で視覚障害者を戦争に動員

視覚障害者の聴覚を活用しようとした例もあります。第２次世界大戦での視覚障害者の戦争協力のことです。

大戦中、政府は「『不具者』といえども祖国の危機を前に手をこまねいているときではない」と障害を持つ学徒も戦争に動員しました。

戦時中に発行された新聞のタイトルに「盲人でさへ挺身」とあります。

つまり、目が見えない盲目の人でも身を投げ出して戦っている、と国民の戦意を高めようとしています。

「爆撃機」の飛行音

蓄音機から流れるのはアメリカの爆撃機が飛ぶ音です。レコードの名前は「敵機爆音集」。

敵の飛行機の音を国民に覚えさせ避難に役立てようと、日本軍が製作したものですが、戦時中、これを使って特殊な訓練が行われていました。このレコードを使って飛行機が敵か味方かを聞き分ける訓練を受け、防空監視隊になるためです。

石川県輪島市では1943～45（昭和18～20）年ごろ、少なくとも５人の視覚障害者が「盲人防空監視哨員（しょういん）」として戦争に動員され、来襲する敵機をいち早く発見するため、戦闘機の音を聞き分ける訓練が行われ、監視要員として実際に配置されました。

戦争初期は目の良い健康な男性が従事していたが、人手不足になると女性が、続いて視覚障害者が駆り出されていったのです。

動員された近江谷さんは「当時は、うれしかった」と感じたそうです。裏返せば、それだけの心理的なプレッシャーが背後にあったのです。

視覚障害者は戦争の『非協力者』とさげすまれる一方で、こういう形で戦争に協力・動員されていました。

政府は国民に戦争への協力を促がすため「国民精神総動員運動」を進めていきました。町内会や隣組の組織を利用し、政府の方針を国民全体に行き渡たらせる体制をつくり、物資や資金が軍事に優先的に回され、国民は耐乏生活を余儀なくされました。食料や衣料は窮乏し、戦費をまかなうために戦時債券の購入を奨励しました。さらに、兵器を造るために、鍋釜など家庭の金属製品が集められ、空襲に備えた訓練も行われていました。

戦争が長引いていくと、学生たちは重要な労働力として工場などに続々と動員されていったのです。

食べる物も不足し、自由にものも言えない

時代。戦局はますます悪くなり、自然とはけ口は体制に逆らう者や穀潰しとさげすまれた障害者に向かっていきます。

戦争などの有事の際には障害者は真っ先に切り捨てられます

障害を理由に殺されかけた事例もあります。脳性小児まひで体に障害がある女性は、幼年時代、母親とともに満州から山口県に引き上げて来ました。そこへ日本兵がやってきて「障害のある子供は有事の時に邪魔になるから殺せ」と母親に青酸カリを手渡したといいます。

「変な顔」「おまえの食べるものはないよ」。思い出すのは、戦時中、母の背で聞いた暴言の数々なのです。

手足と顔にまひのある娘をおぶって歩く母に、通りすがりの人が冷たい視線を浴びせた。わざわざ呼び止めて「荷物かと思ったら何だ。そんなのからって（背負って）出掛けるな。みっともない」と言い放つ警察官もいました。

父は軍人で、生後3カ月のころに戦地で命を落としました。男は戦場へ、女は銃後を支える。できなければ半人前。弱者にとことん厳しい空気が、子どもにまで押し付けられる時代だったのです。

障害があることによってのスパイ容疑だったり、拷問を受けたりといった事例もありました。およそ2年半かけて障害者の戦争体験を調べた上間さんは、次のように語りました。「僕自身、戦争だけでなく地震や津波など災害の時も含めて一番最初に犠牲になるのは立場の弱い障碍者と言われているので、そういう状況になった時には一番最初に犠牲になるのかなと感じています。」

実際に沖縄戦では、日本の憲兵の質問にうまく答えられず、スパイだと疑われ殺される聴覚障害者もいたといいます。まだ子どもだった西平さんにスパイの疑いが掛かることはなかった。だが戦況悪化とともに、村に駐在していた日本兵の態度は一変した。銃剣を振りかざして食料を強奪したり、住民に暴力を振るったりする姿を目にしました。

音のない世界に住む西平さんにとって、戦争の記憶は戦闘機のごう音や機銃乱射のさく裂音ではなく、目の前で激高する兵隊の姿だといいます。

右半身にマヒがある男性も、障害のため兵隊になって国のために戦えない。徴兵検査で不合格になり、「国家の米食い虫」と言われた。

そうした負い目や軍国教育の影響もあり、国のために戦いたいと考えた障害者もいました。障害があっても人間魚雷になら乗れる、と訴え、なんとか役に立ちたいと願ったものでした。

障害者は空襲をうけると、どちらに逃げると安全なのか、そういう情報が入って来なくなり逃げまどったと聞いています。

障害のある子たちは戦力にならないので学童疎開等、後回しにされたり、盲学校そのものが空襲に会い、学び場が失われたということも沢山報告があります。

沖縄の場合は本当に激しい空襲があり、その中で見えない人たちも逃げ回らなければならなかったのです。

盲教育、ろう教育の義務化は明治39年から国に要望していたが、予算の使い方が軍備の方に偏っていったので、義務教育の実施が遅れました。

見えなくても戦争への参加の仕方があるというヒント、呼び掛けを色んな形で与えられると、取り組んでみたいという気持ちに駆られていったということは判るような気がします。

こんな話もあります。息子さんが太平洋の小さな島で戦死したと知らされた、その悲しみを家族にさえ、語ることはありませんでした。「お国のため」という大義名分で社会に出た女性たちは、その大義のもとで、次第に本音を言えなくなっていったのです。

息子が亡くなって悲しいのは人間の母、それではだめなんだと。国の母として、息子が死んで国のために死んでよかったと思わなければいけない。家族の者が非国民と呼ばれ、いわゆる村八分にあってはいけないと、まず家族のことを考えたそうです。

人間を「戦力」と見なす時代、障害者の尊厳はふみにじられました。兵士の命も軽んじ

られました。そして、戦争が最も大量に障害者を生み出します。

日本軍は、精神障害兵士は一人もいないとその存在を隠していました。実際には、１万人を超える兵士が精神を病んで国府台病院へ送られていたのです。

中国の河北省で、村の討伐へ駆り出された師団の患者は、問診で告白しています。「12歳の子供を突き殺し可哀想だなと」「いつまでも頭にこびりつき病変の起こる前にはなんだかそれが出て来る」と。

入院した患者のほとんどは故郷に帰ることが出来ませんでした。原因のひとつが、家族・親族からの反対があったからです。

故郷では「英霊」扱いになっているケースもあり、要するに、「勇敢に戦って死んだことになっているのに、実は東京で精神科病院に入れられていたことが今さら周りに知られては困る」と、故郷の家族・親族から拒絶されてしまうのでした。戦争が終わってもなお、たたき込まれた精神が癒えない事に驚かされます。

私の子どもの頃は松葉杖をついたり、片手がない人など、体に傷を負った傷痍軍人の方を多く見ました。

ドイツでは「戦争は不治の病人を抹殺する絶好の機会である」とアドルフ・ヒトラーは、提言しました。身体障害者や精神障害者は社会には「無用」であり、アーリア人の遺伝的な純粋性を脅かすため、生きる価値なしと見なされました。第二次世界大戦が始まると、知的障害、身体障害、精神障害のある人は、ナチスが「T-4」または「安楽死」プログラムと呼んでいた殺害の標的とされました。

これは、後のアウシュビッツに代表されるユダヤ人絶滅作戦に引き継がれることとなりました。「T-4作戦」は別の機会に取り上げたいと思っています。

戦争が終わり、「戦争に役立つか」という指標が、今は、「経済に役立つか」に変わったような気がします。今でも人間を生産性で判断する価値観は変わっていないのではないのでしょうか。

障害者差別は戦争当時に限った話という訳ではなく、ハンセン病患者隔離政策に見られた優生保護法の問題や津久井やまゆり園で発生した事件の背景にも、命をかたよった物差しで測ろうとする空気感があるのではないでしょうか。戦争を「過去にあった大変なこと」で終わらせるのではなく、現代の問題としてとらえ直す必要があります。

植松被告の手紙には、「私の目標は重度障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です」などと書いています。

また逮捕されて以降、一度も後悔を述べたことはありません。

民主主義のお手本とみられていたアメリカでは、トランプ米大統領に批判的な報道に対し、ツイッターなどを通じて「フェイク（偽）ニュース」を度々連発しています。

大統領選では武器を持ってしても相手を排除しようと考える一部の支持者もおり、トランプ応援へ駆り立てる熱気と分断と貧富の差が広がる怖さを感じました。

世界では貧しき者はますます貧しくなり、ポピュリズムや独裁的な政権が増えています。

一方で、ESG投資[注]やSDGs（持続可能な開発目標）、地球温暖化に対する取組など様々な取組が始り、希望も見えます。

私たちは、今どこに向かうべきか、考えていかなければなりません。

［注］従来の投資は「売上高・利益」といった実績重視に対し、貧富の格差、地球環境問題など、直面する様々な課題に対して「環境（E）・社会（S）・企業統治（G）」への取り組みが適切に行われているかを重視する投資方法。

以下のWebページを参考にさせていただきました。

・山形県手をつなぐ育成会
・視覚障害者と戦争／岸博実
・ノーマライゼーション　障害者の福祉
・西日本新聞　・「NEWS23」スタッフノート
・iRONNA　・ホロコースト百科辞典

［注］記述中に差別的な用語がありますが、その当時の考えを知るために、そのままで記載します。

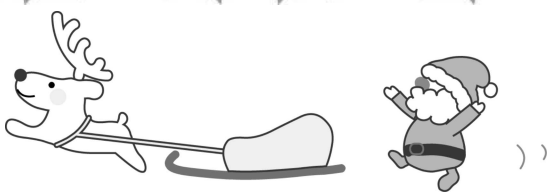
ミニ情報　「ニポラチャンネル」・「日ラ展ちゃんねる」を公開中

情報文化センターでは、YouTubeで「ニポラチャンネル」を配信しています。音声ガイド機能のVoice Overを使ったiPhoneの基本操作やいろいろなアプリの紹介、拡大読書器の紹介や白杖についての話など、分かりやすく情報を伝える動画となっています。どのような便利な道具があるのか、当事者の方がどのようにスマホなどを使われているのかなど、ボランティアの皆様にも参考になる部分があると思いますので、ぜひご覧になってみてください。

視聴方法はYouTubeアプリから「ニポラチャンネル」を検索していただくほか、情報文化センターのホームページ上のYouTubeのロゴをクリックして動画の一覧を表示することも出来ます。

また、来年の３月末まで「日ラ展ちゃんねる」も公開中です。こちらは例年秋に開催している日本ライトハウス展のオンライン企画で、様々なメーカーにご参加いただき、各種機器類やグッズなどを紹介していただいている動画です。こちらも是非参考になさってください。

おしらせ



・12月25日（金）から1月5日（火）まで、対面リーディングはお休みです

当館の冬期休館に伴い、12月25日（金）から1月5日（火）まで、対面リーディングサービスはお休みとなります。

上記以外は通常通りとなります。なにかとお忙しい時期とは存じますが、ご都合の合う日がありましたら、ご協力のほど宜しくお願いいたします。

・「盲導犬チャリティーカレンダー」が発売中です

日本ライトハウス盲導犬訓練所では、毎年ご好評をいただいております「盲導犬チャリティーカレンダー」を販売中です。今年はデザインを一新し、盲導犬の写真を月毎に掲載しています。A4版（見開きA3版）の壁掛けタイプで価格は1000円（税込）です。

見本は盲導犬訓練所のホームページ（http://www.guidedog-lighthouse.jp/）でご覧いただけます。通販をご希望の方は、盲導犬訓練所（0721-72-0914）までお願いします。当館3階総務係でも販売しています。

今年も残り僅か。何気ない日常が脆く危ういものだと改めて実感した1年でした。現状は厳しいですが、来年は少しでも明るい兆しが見える年になるよう願いたいものです。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）